

〈連動報告〉

「枢要徳」概念の源泉と変容

土橋 茂樹

1. はじめに

語源を ἄριστος (「最善の」) と同じくする「徳」(ἀρετή) という語は¹⁾、その使用をホメロスにまで遡り、人間の美点のみならず、神々の力 (*Iliad*, IX498) や駿馬の気性や速さ (*ib.*, XXIII276, 374) など、およそあらゆる事物の卓越性を記述する概念であった。ホメロスにおいてさえ、「徳」は戦士の強さや技能、とりわけ英雄の勇敢さを表示するのみならず、精神的な卓越性に対しても用いられたが (*ib.*, XV641ff), 徳の教師を自称するソフィストに対するソクラテスの問答を経た後のプラトンの時代ともなると、「徳」はもっぱら倫理的な領域で主題化されるようになる。後に「枢要徳」と呼ばれる思慮 (φρόνησις) (ないし知恵 (σοφία)), 節制 (σωφροσύνη), 正義 (δικαιοσύνη), 勇気 (ἀνδρεία) の四徳が当時諸々の徳目の上位概念とみなされていた事情もまた、数々のプラトン対話篇から窺い知られる。とりわけ『国家』篇においてポリスの三階層とその統合とを魂の三区分に類比し四徳を導出するに至る議論は、枢要徳が四徳である所以を最初に明かした言説とも言い得るだろう。

しかし、プラトン以降、古典期、ヘレニズム期を経て古代末期西方においてアンブロシウスが「枢要徳」という名を冠して徳目を固定化するまでの間、四徳をめぐっては少なからぬ議論が展開された。こうしたいわば「枢要徳概念の源泉」を探索しておくことは、中世の枢要徳思想をめぐる歴史研究を主たる目的とする本シンポジウムにとって、欠かすことのできない予備作業となるだろう。とりわけ、諸概念の変遷の調査結果をわかり

1) ἀρέσκω を語源とみなす M. Hoffmann の近代的な解釈への批判に関しては、W. Jaeger, *Paideia*, vol. 1, tr. by G. Highet, Oxford, 1973 (1939¹), p. 418, n. 18 を参照。

やすく図式化しようとするあまり、その背後に複雑に絡み合う本質的問題位相を見落とすことがないよう、このいわば「枢要徳以前」の四徳をめぐる思想動向をせめてその理論構成だけでも別出しておかねばなるまい。

そもそも、徳の習得と徳に基づく活動を人間本性の完成とみなすならば、人間本性をどのように理解するかに応じて徳の理解にも相違が見出されるはずである。仮に解釈の座標軸を魂と身体の関係、および神と人間の関係においた場合、人間本性の完成を「神に似ること」(ὁμοίωσις θεῶ) とみなすプラトン主義的伝統は²⁾、身体性からの脱却および神性への近似を理念化したものとなるが、プロティノスが明記したように、そのためのいわば活動の生における市民的徳と観想の生における浄化的徳の位置付け、さらには浄化的徳すらも超越した神との合一に至る理路において、プラトン、アリストテレス、ストア派、新プラトン主義はそれぞれどのような人間論を展開するのか、その点においてこそ四徳をめぐる考察の基本的視座が見出されるものと思われる。

本報告では、以上のような予備的考察を踏まえた上で、まず、源泉としてのギリシア哲学の四徳論をプラトン、アリストテレス、初期ストア派において概観し(2-1~3)、それらがどのように受容され、変容されていったかを、新プラトン主義における徳の階層化と中期プラトン主義における徳論の混淆化という観点から考察する(3-1~2)。その上で、モーセ五書の意味解明のための手段として四徳論を相対化していったユダヤ教徒フィロンの徳論を具体的に考察していく(3-3)。フィロンにあってギリシア的四徳は確かに継承され、創世記に基づいた四であることの寓意的解釈も提示されはしたが、その一方で古典ギリシア思想には登場することのなかった慈愛(φιλανθρωπία)と敬神(εὐσέβεια)の密接な結びつきが強調され、後世にも影響を及ぼす独自の徳論が展開された。「枢要徳」前夜のギリシア思想とユダヤ經典の混淆がもたらす濃厚な徳論のもつ射程をフィロン哲学の内に探りたい。

次いで、「枢要徳」概念が定着し精緻に展開された14-15世紀東方キリスト教圏での変容モデルの典型として、パレオロゴス朝ルネサンスを代表するプラトン主義者ゲオルギオス・ゲμισトス・プレトンの枢要徳論を考察する(3-4)。彼の枢要徳論が古代末期とは明らかに異なる人間論に裏打ちされたものであることを示すと同時に、そこにまで至る諸哲学学派の影

2) この点については、拙著『教父と哲学——ギリシア教父哲学論集』、知泉書館、2019年、第6章を参照されたい。

響の交錯と変容の歴史の一端を垣間見ることができれば幸いである。(なお、本報告の目的はあくまで「枢要徳」理解に資すると思われる範囲での多様な議論のいわば概念史的布置 (constellation) を下絵として描くことにあり、個々の議論を構成するテキスト解釈上の詳細にまでは立ち入れないことを予めお断りしておく)。

2. 「枢要徳」概念の源泉

2-1. プラトン

枢要徳概念の源泉と目される四つの徳目に関しては、プラトンの諸対話篇を見比べてみても、徳目名に多少の変動はあるもののその当時までにはある程度定着していたものと思われる³⁾。たしかに数多くの徳目のうち典型的なものをただ列挙するだけのことなら、とりたてて四徳である必要はない。現に『プロタゴラス』篇では、学知・正義・勇気・節制と併せて「敬虔」も挙げられている (*Prot.* 330b3-6)⁴⁾。しかし『国家』篇ではさらに踏み込んで、ポリスの三種族 (生産者・戦士・守護者) と魂の三部分 (欲望・気概・理性) とが類比されることによって、三部分それぞれに固有の徳 (節制・勇気・思慮) と、それらが自己の本分を尽くしながら全体として統合され調和しているという意味での徳 (正義) とが合わせて四徳として導出されており、そこにおいて初めて四徳であることの理論的根拠が示されたということもできる。では、もしこのように四徳であることの根拠が魂の三区分にあるとするなら、魂の区分に関して異なった主張がなされる場合、その徳論において四徳はどのように説明されるのか、あるいはとりたてて四徳が挙示されずにそれとは異なる徳理論が展開されるのだろうか。

2-2. アリストテレス

その点でアリストテレスの徳論はきわめて示唆に富む。もちろん、徳

3) プラトンにおいて、「思慮」はしばしば「知恵」「学知」(ἐπιστήμη)「術知」(τέχνη)と言い換えられ、『法律』篇 (631c5-d1) においては「神的な善のうち首位に立つもの」とみなされている。「プロタゴラス」篇での徳の教授可能性をめぐる議論に顕著に見出されるソクラテスの主知主義 (「正義も節制も勇気も、すべては知識である」361a6-b3) は、少なくとも知性抜きに徳は生じ得ない (*Meno*, 99e4-100a2) という限りでプラトンにも共有されているものと思われる。

4) 実際、プラトンにおける徳の区分は必ずしも四徳説ばかりとは限らず、魂を「神々の世話」と「人間の世話」のそれぞれに関する部分に二分し、前者の徳として敬虔を、後者にその他の徳を配するという考えが示されるテキスト箇所もある (*Euthyph.* 12e5-8)。

の典型として四徳が列挙される箇所 (e.g., *Pol.* 1323a27-29) がアリストテレスにないわけではないが、彼の徳論の本領はそこにはない。なによりまずアリストテレスによれば、人間の魂は二つの部分をもつ。一つは理性 (λόγος) をもち、理性をもつことによって魂に指令する。他方は理性をもたないが理性をもつ部分に従うことのできる能力を自然に備えている。その上で、この魂の二区分に即して徳も「思考に関する知性的な徳」(διανοητική ἀρετή) と「性格に関する倫理的な徳」(ἠθικὴ ἀρετή) の二種に区分される。

まず知性的な徳について見るならば、「知恵」と「思慮」とをほとんど同義的に用いたプラトンに対して、アリストテレスは両者をその対象に即して明確に区別した。すなわち「知恵」は、その対象が「他の仕方であり得ない」つまり必然的・普遍的・抽象的で、完全な正確さを期することができる観想活動の対象であるのに対して、「思慮」は、その対象が「他の仕方であり得る」つまり偶然的・特殊的・具体的で、完全な明瞭さを期し得ない実践活動の対象である。両者は、「理性をもつ部分」の異なる二つの部分、すなわち「学知をもつ部分」(ἐπιστημονικόν) と「思案をめぐらす部分」(λογιστικόν) の徳である。

対して「理性をもたないが理性に聞き従う部分」の「性格」(ἦθος) の性質／性向 (ἕξις) である倫理的な徳は、知性的徳が教育によるのに対して、習慣・訓練によって形成される。徳目としては勇氣、節制、正義を含む 10 数種が挙げられ、なかでも「法に適うこと」に即した正義は、徳の全体を覆う「完全な徳」(ἀρετή τελεία) とみなされる (*EN*, 1129b25-27, 1130b7, 19, 22f.)。こうした倫理的徳は、人間の善き生全体としていかに為すべきかを個別的状況において思案熟慮し選択する思慮 (*EN*, 1140a25-28) との協働によって初めて善い行為をもたらすことができる。それはまた、「思慮ある者がそれに拠って規定するような理 (ロゴス) によって規定された我々との関係における中間性」(*EN*, 1106b36-1107a2) いわゆる「中庸の徳」としても考察される。

いずれにせよ、アリストテレスが未決のまま後世に残したのは、人間本性の完成としての善き生を、人間に固有の機能を徳に基づいて完全に実現させること、その限りで倫理的徳と知性的徳=思慮とを包括した「人間的な徳」(ἀνθρωπίνη ἀρετή) に基づいた活動の生とみなすか、あるいは知性的徳=知恵に基づいた人間において最高最善の (つまり神的な) 観想の生とみなすか、という難問であった。

2-3. 初期ストア派

他方、初期ストア派では「自然に従って生きる」ということを生の目的とするが、ここで「自然に従う」とは、万物に行き渡る共通の法としての「正しいロゴス」(ὁρθὸς λόγος) に従うことであり、自然に従って生きるということがまさに幸福者の徳であり、「生の滞りなさ」(εὐχροία βίου) である (DL, *Vitae*, VII87-88)。彼らにとって徳とは、「理性的部分の、まさに理性的部分としての限りの、自然本性に即した完成 (τὸ τέλειον κατὰ φύσιν)」である (ib., VII94)。その際、「徳を魂の指導的部分 (ἡγεμονικόν) の理性によって生み出された性質と能力、あるいはむしろ協動的で確固とした不変の理性そのものであると想定している」(Long & Sedley, vol. 1, p.377f., 61B) 以上、ストア派において魂に部分はなく理性一元的であり、その限りで徳もまた本質的に同一である⁵⁾。

しかしその一方で、彼らも四徳の区別を認め、それらは互いから分離してはいないが、互いと異なり区別されるとみなす。ただし、「それらの徳のそれぞれが定義される場合は、勇氣は耐えるべき事柄における思慮であり、節制は選択における思慮であり、固有の意味で語られる思慮は活動における思慮であり、正義は配分されるべき事柄における思慮であると言われる。というのも、それらの事柄に関わる状態によって、その働きの点で異なるように思われているのは、実は一つの徳だから」という主張が彼らのものとして伝えられている (id., p.378, 61C)。この点については論敵たちから自己矛盾しているとの非難を招いたが、徳の数多性・差異性と同一性をめぐるこのストア的解法は徳論上の根本問題として後世に大きな影響を与えることとなる。

以上の概観より、枢要徳概念の源泉として次の3類型が見出される。すなわち、①魂の三部分説によって四徳を根拠づける (プラトン)、②四徳説をエンドクサの一つとして受容するが、より体系的な魂論によって知性的徳と多様な倫理的徳の理論的基礎づけを行う (アリストテレス)、③徳の同一性と四徳の数多性とを理性一元的に総合する (初期ストア派)、以上の3類型である。さて次に、これら3類型を独自の仕方でも継承ないし総合していくことによって枢要徳概念がどのように変容していったかを次節において見ていきたい。

5) したがって、ストア派において「パトスとは、激烈さを増した完全に誤った判断によってもたらされた劣悪で自制がきかなくなった理性」自身のことであり、決して指導的部分に対抗する非理性的部分がそれ自体として措定されていたわけではない。

3. 「枢要徳」概念の変容

3-1. 新プラトン主義——徳の階層化

(1) プロティノス以降、新プラトン主義において顕著となるのは徳の階層化という動きである。まずプロティノスは、『徳について』(Enn. I2 [19]1.1-10)においてプラトン『テアイテトス』(176b1-3)を引きながら、この世の悪から逃れるとは「できるかぎり神に似ること」であり、そのためには「思慮をもって正しく敬虔になること」つまり一般的には「徳をもつこと」が必要だと説く。その上で、「神に似ること」には二通りあると指摘し(*ib.*, 2.1-4)、叡智界における「原型」(ἀρχέτυπον)に対して我々の魂の内にある「似像」(μίμημα)としての徳を、政治的(市民的)徳(πολιτικά ἄρεταί)と浄化的徳(καθάρσεις)に二分していく。それは以下のように①から③へと上昇する三階層となる。

① 政治的徳とは、「推論的能力に関わる思慮、気概的能力にかかわる勇氣、欲望的能力の推論的能力に対する和合と調和における節制、支配と被支配の関係において自分自身の固有の仕事をおこなう魂の諸能力の一致にかかわる正義」(*ib.*, 1.13-21)のことであり、我々に実際に秩序を与え、我々をより善くする。

② 浄化的徳とは以下のようなより高次の徳のことである。すなわち、「魂においてもより高次の正義はヌースへと関係づけられた活動であり、[より高次の]節制はヌースと関係づけられた内への[魂の]向け変えであり、[より高次の]勇氣は[魂が]目指す本性上の不受動に似ることによる不受動である。」(*ib.*, 6.12-27)

③ しかし、叡智界におけるいわゆる「範型」(παράδειγμα)は徳ではない。

この内、①と②は魂の内であり、③はヌースの内にある。特に知恵と思慮に関して言えば、両者は「その本質がヌースに含まれているもの〔すなわちイデア〕の観想にある」が、それぞれは魂の内にある限りで徳である。したがって、②においてより高次の思慮(=知恵)をヌースに含まれたイデアへの観想と解すことができれば、四徳は、感性界における魂に関係づけられた限りでの政治的徳と、叡智界におけるヌースに関係づけられた限りでのより高次の浄化的徳という二つの階層それぞれにおいて規定されることになる(つまり、低次の四徳と高次の四徳という仕方)で。それらは、叡智界における神的範型に似ることによって、すべてのパトスから

解放され「神に似たもの」となるのである。しかし、一旦叡智界に上昇したなら、もはやそのための条件であった浄化的徳すら必要ではなくなる。「なぜなら、我々が類似すべきは神々であって、善い人たちではないから」(ib., 7.27f.) であり、プロティノスにとって「神に似ること」とは、一者への帰還、その限りでの神との合一という極めて神秘神学的な領域へと移行するからである。

(2) ポルフェリオスやイアンブリコスになると、徳の階層化はさらに進み、より細分化されていく。まずポルフェリオスによれば、「実践的な徳に従って活動する者は善い人間であり、浄化的徳に従って活動する者はダイモン(神霊)的な人間(δαμόνιος ἄνθρωπος)、あるいは善きダイモン(δαίμων ἀγαθός)であり、知性のための徳〔観想的な徳〕だけに従う者は神(θεός)であり、典型的な徳(παραδειγματικὰ ἀρεταί)に従う者は「神々の父」(θεῶν πατήρ)である」(Sententiae, c. 32, pp. 30f.) と主張される。

対してイアンブリコスは、ポルフェリオスの観想的な徳と典型的な徳を人間的な知性の段階と解釈し、それより上位の「神聖な」(ἱερατικά)あるいは「神働術的」(θεουργικά)な徳と区別した⁶⁾。ここで「神働術」とは、その名称「テウールギアー」が「神の働き(テウ・エネルギー)」に由来する限り、文字通り「神々の働き=神々の〔デーミウールゴス的〕創造活動の模倣」であり「儀式化した宇宙生成論」にはかならない。また、神働術の働きにもヒエラルキーがあり、高次の働きが超自然的な神々の働きを開示するいわば形而上学的な働きであるとすれば、低次の働きはむしろ人間にとって有益なものとみなされる。しかし、宗教儀式において超自然的な力を明示する神働術は、魔術のように人間が自らの必要のために神々の働きを利用するのではなく、あくまでもその術知によって魂のほうがその神的原因へと立ち戻ることを目指すものである。物質界へ降下する間に魂が変化し損なわれると確信するプラトン主義者イアンブリコスにとって、神働術こそが神的領域へと再び上昇・帰還するための唯一の手段であったことは間違いあるまい。その限りで、神働術による神聖な儀式とは、「デーミウールゴスと万物の父からこの地へと送られた存在するものの永遠の尺度(μέτρα αἰδία)と驚嘆すべきしるし(ἐνθήματα

6) イアンブリコスおよび神働術については、拙稿「宇宙創造の再現としての神働術——新プラトン主義的自然神学の哲学的背景」『自然を前にした人間の哲学』(神崎忠昭・野元晋編)、慶応義塾大学出版会、2020年、pp. 81-104を参照されたい。

Θαυμαστά)」(Myst. 1. 24 [65. 5-7]) による神々の秩序の模倣・再現であり、唯一その実践を通してのみ、身体化(=受肉)した魂は宇宙創造の神的原因(すなわち神的エネルギー)に与り得るようになるのである。

3-2. 中期プラトン主義——多様な「徳」論の混淆化

続いて中期プラトン主義に属するアルキノオス(『プラトン哲学講義』XXIX, XXX)の内に頻繁に見出されるのが、多様な「徳」論の混淆化、すなわち枢要徳概念の源泉として取り上げた「徳」論の三類型が四徳の説明に際して自在に織り交ぜられていく傾向である。

まず、徳を「神的な事柄」であり、「魂の完全で最善の状態(διάθεσις ψυχῆς τελεία καὶ βελτίστη)」と一般的に規定した上で、アルキノオスは枢要四徳を以下のように規定していく。すなわち、「徳の種に属するもののうち、知恵や思慮のような魂の理性的な部分に存する徳は理性的である。勇気や節制のような魂の非理性的な部分に存する徳は非理性的である。勇気は魂の気概的部分(τὸ θυμικόν)に、節制は欲望的部分(τὸ ἐπιθυμητικόν)に存する。実際、理性的部分(τὸ λογιστικόν)と気概的部分と欲望的部分は異なり、それぞれの完成(τελειότης)も異なる。理性的部分の完成に属するのは思慮であり、気概的部分の完成は勇気、欲望的部分の完成は節制である。」(XXIX 1)

「正義は、魂の三つの部分の互いに対するある種の調和であり、魂の三つの部分の相互に対する一致と調和をもたらし、あたかもそれが思慮、勇気、節制の三つの徳の究極の完成(παντέλεια)であるかのように、そのそれぞれが自らに固有の、それぞれに値する仕事を果たすように仕向ける能力である。[そのような魂においては]魂の理性的部分が支配し、他の部分は自らに固有の特性に従って理性的部分によって秩序づけられ、既にそれに服従するようなものとなっている。それゆえ、諸徳は相互に互いを含み合う(ἀντακολουθεῖν)と考えられねばならない。」(XXIX 3)

以上の説明において、魂を理性的な部分と非理性的な部分に二分し、前者に知恵と思慮、後者に勇気や節制を配する説明はアリストテレス的だが、その直後に魂を理性・気概・欲望の部分に三分する説明はプラトンのである。さらに徳の「完成」という観点からなされる規定はストア的である。この点でのストア的説明によれば、「徳はまた他の仕方、たとえば「生まれつき善い素質」とか「徳の点での向上」(προκοπῆ καὶ πρὸς ἀρετήν)といった仕方でも語られ、そうしたものは完成段階との類似に従って完成

段階と同じ〔徳の〕名で呼ばれる。そのような意味で我々はある兵士を「勇敢な」と呼ぶのであり、時には無思慮だが勇敢だと言うこともあるが、こうした場合、我々は不完全な徳に言及しているのである。」(XXX 1)

このように多様な徳の説明方式によって規定された諸徳が相互に互いを包含し合い、重なり合うのはごく自然なことであるし、徳の完成の度合いに段階が認められることによって個々の徳がますます多様な表象を得ていったのも不思議ではない。実際、初期ストア派において徳は完全でなければ必然的に不完全な悪徳とみなされ、それらの中間状態が認められていなかったが、ローマ期のストア派においては不完全な徳からごく自然に完成に向かって向上していくものと考えられるようになっていった。

3-3. ユダヤ教徒フィロン

ヘレニズム化したアレクサンドレイアのユダヤ教徒フィロンにも、古代ギリシア伝来の四徳説はプラトン主義を介して受容されたが、徳目が四つであること理由づけを彼は旧約の「創世記」に見出している。すなわち、「モーセは〔創世記 2:10-14 の記述によって〕部分をなす〔個々の〕徳を言い表そうとする。数の上でそれらは四つ、すなわち思慮、節制、勇気、正義である。それら四つがそこから流出する最も大きな河が我々によって善性と呼ばれる一般的徳である。他方、流出した四つの川は四つの徳である」(『律法の寓意的解釈』 29. 63)。ここでフィロンは、神の知恵から流れ出した河(すなわち一般的徳)が、エデンの園において四つの流域を流れる河つまり四つの徳へと分岐した、というように創世記の当該箇所を四徳説によって寓意的に解釈したわけである。

彼はまた、エデンの園に生えている「生命の木」や「善悪を知る木」などの木々(創 2:9)を「徳の木々」と寓意的に解し、ストア派の用語を使って「それらの徳の木々は、個々の徳とそれらに即した活動、〈正当な行為〉(κατορθώματα)、さらに哲学者たちに〈適切なこと〉(καθήκοντα)と呼ばれているものである」(同上 17. 56)と注釈している⁷⁾。

他方、こうしたギリシア哲学からの影響にもかかわらず、フィロンの徳論ではやはりユダヤ教的な徳目が目につく。たとえば、墮落したユダヤ教徒に向けられた回復のための徳である「悔い改め」(μετάνοια)がそうで

7) 「適切なこと」のうちの完全なものが「正当な行為」であり、キケロ (*de officiis*, I. iii. 8) によって前者は「一般(／中間)義務」(*commune/medium officium*)、後者は「完全義務」(*officium perfectum*)とラテン語訳された。

ある。しかし、非常に興味深いのは、悔い改めの徳を説明するために彼が四徳を用いている点である。すなわち、「それを知らないことが恥となるような事柄について無知から知に、無思慮から思慮に、節制のなさから節制 (ἐγκράτεια) に、不正から正義に、臆病から大胆 (θαρραλεότης) に至ること〔を「悔い改め」は意味している〕⁸⁾(『徳について』 34. 180-181)。

では、一体どのような過程をへて上述の四徳目すなわち思慮・節制・正義・勇気(大胆)に至ったのであろうか。『徳について』(de virtutibus)はL. Cohnによって4部に区分され、それぞれに副題として、勇気(ἀνδρεία)・慈愛(φιλανθρωπία)・悔い改め(μετάνοια)・よい生まれ(εὐγένεια)の四徳が挙げられていた。同書のタイトルはエウセビオス『教会史』II 18「モーセが他の徳と共に書いた三つの徳について」に基づいてCohnが付したものだが、彼は同書中もっとも長い慈愛の章に比して「悔い改め」と「よい生まれ」がほとんど付け足しに過ぎないことに着眼し、同書のオリジナルが、勇気・敬神(εὐσέβεια)・慈愛の三徳目から成ると推測した。敬神の章はその後テキストが散失し、他の徳が補填されたというのがCohn説だが、それに反対する論者は少なくない。テキスト自体の証言としては、同書の冒頭部で、「正義とそれに関連する事柄については既に直前で述べたので、以下では勇気について扱う」とあり、「直前で」という語が『律法詳論』第4巻の最終セクションへの言及であって、さらにそのセクションの直前の「徳の女王である敬神ないし敬虔、さらに思慮と節制については既に述べられた。そこで次には……正義について語られねばならない」という記述から、敬神／敬虔・思慮・節制・正義・勇気・慈愛という並び順が再構成される。ここから両端の敬神／敬虔と慈愛がはずれることで、先に掲げた思慮・節制・正義・勇気(大胆)が導出されたものと考えられる。ここからわかることは、フィロンにおいても確かにギリシア的な四徳は徳の典型例として度々登場するが、それにもかかわらず『徳について』の大部分は慈愛・悔い改め・よい生まれというユダヤ教的な徳目で占められているという点である。この点は徳論における枢要徳の役割を考える上で重要である。

8) 四つの徳目のうち、フィロンでは「節制」にἐγκράτειαが、「勇気」にθαρραλεότης(大胆さ)が充てられることがある。

3-4. 14-15 世紀東方キリスト教圏でのプラトン主義の変容

最後に、徳の階層化や徳論の混淆化、多様化を経て、枢要徳概念が最終的にどのような形に変容していったかという一例を、14-15 世紀東方のプラトン主義者ゲオルギオス・ゲミストス・プレトンの徳論から抽出した徳目リストにおいて確認してみたい⁹⁾。

人間の義務を表す 12 徳

* 人間を物事それ自体に関係づけて特徴づける徳。理性的部分の徳。

思慮 (=知恵)	}	思慮深さ (εὐβουλία) : 人間の事柄に関する知
		自然理解 (φύσις) : 自然に関する知
		敬神 (θεοσεβεία) : 神を畏れ敬い、崇める心

* 他人に対する徳。他者との関係の中で自己を保持する性向。

正義	}	敬虔 (όσιότης) : 神に対する正しい態度と活動
		市民的徳 (πολιτεία) : 公的な事柄に関わる徳
		誠実さ (χρηστότης) : 私的な事柄に関わる徳

* 非自発的 (強制的・暴力的) な感情・情態に関する徳。

勇気	}	気高さ (γενναίότης) : 自らの選択の結果や強制の痛みに耐える
		陽気さ (εὐψύχια) : 運命の打撃も神慮による目的を信じ耐える
		温厚さ (πραότης) : 他人からの攻撃に耐える

* 自発的な感情に関して欲求を制御する徳。

節制	}	礼節 (κοσμιότης) : 快楽に対する自制
		寛大さ (ἐλευθεριότης) : 金銭の使用に対する自制
		中庸 (μετριότης) : 名誉の追求に関する自制

このリストに登場する諸徳の名称や特徴は、プラトン・アリストテレス・ストア派の徳論を源泉とするものが多い。その意味では徳論の混淆化

9) Cf. L. Alexidze, Plethon on the Grades of Virtues: Back to Plato via Neoplatonism? in: S. Mariev (ed.), *Byzantine Perspectives on Neoplatonism*, de Gruyter, Boston/Berlin, 2017, pp. 221-242.

が極めて顕著である。また、このリストの最大の特徴は、人間活動の実践的側面が重要視されている点にある。魂の内に真の自己を探し求め、神に似ることを目指すプラトン主義と異なり、社会的・政治的活動の生 (*vita activa*) の内に心身複合体としての人間本性の実現を見出そうとする点で、プレトンはイタリア・ルネサンスの申し子とも言い得るだろう。

4. 結 び

現代の徳倫理をめぐる論争の一つに、「徳とは人をよい人にする性質である」という極めてシンプルかつ抽象的な規定によって、「人間のよさ」という薄い概念を少しでも「濃い」ものにしていくための提案でありさえすれば、すべて歓迎するという多元主義的な徳理論をめぐるものがある¹⁰⁾。この立場への反論は、そのような徳理解の多様性が実践場面での倫理規範そのものの基盤を崩しかねない、というものである。本稿で見てきたように、人間本性の完成が向かう方位は、上昇と下降、超越と内在、神と人間、魂と身体といった複数の座標軸からなる空間に定位されるが、互いに逆行する多様な方位が「人間本性」という普遍一元化した概念とはたして整合的であり得るだろうか。そもそも徳倫理学というものが、普遍的だが希薄な「善」概念によって構成された倫理学理論を、ローカルで濃い徳概念によって補完し得るという可能性によって再評価されたのだとすれば、枢要徳が思想史上に果たした役割というのものも、普遍的で希薄な「善」概念とローカルで濃い「徳」概念を媒介する働きの内に見出されるのではないだろうか。どれほど互いに異なる徳理解であってもそれぞれの理路に即した形で人間本性の完成として語り得、いわばトポスとして共有し理解し合える性格類型こそが「枢要徳」概念の意味するところではないだろうか。

10) Cf. M. Alfano (ed.), *Current Controversies in Virtue Theory*, Routledge, New York, 2015.